

C-48 寝具の太陽光線による乾燥効果について

東京学芸大卒業生〇武居恵美子 田中みゆき 東京学芸大 中橋美智子

目的 一般に寝具は湿りやすく、特に高湿時・厳寒時など安臥性・保温性などが問題となる。本実験は就寝時による寝具類の吸湿量の変化、太陽光線による乾燥効果について、被服衛生学の見地から寝具の効果的一管理法の考察を行なったので、ここにその結果を報告する。

方法 試料：敷ふとん新（白綿・新調），旧（白綿・使用年数4年）

実験：(1)就寝による寝具類の吸湿量の変化，敷ふとんのかさ高変化 時期昭和47年9月初旬 一週間就寝による逐次変化 (2)太陽光線による乾燥効果 時期昭和47年11月初旬～昭和48年1月中旬 新・旧敷ふとんの重量・かさ高・温度変化，乾燥方法の相違による重量・かさ高・温度変化

結果 就寝により敷ふとん・毛布は吸湿量が増加する傾向がみられ，その他の寝具（寝衣・敷布・タオル掛）はほとんど変化が認められない。新しい敷ふとんは吸湿率が高く，かさ高の減少率も著しい。太陽光線による乾燥効果は，重量減少率約1.5%（100g），かさ高増加率約60%，温度変化日射面約45℃，日陰面10～15℃である。温度変化はふとんの新旧に関係なく，ふとん布の色相・明度による影響が著しい。重量・かさ高・温度変化と気象条件との間に相関性が認められた。